

東通天然ヒラメ刺身重 7月1日のデビューから334日目で年間目標6,000食突破!

当村の新・OMOTENASHIご当地グルメ「東通天然ヒラメ刺身重」が、デビュー1周年を待たずに年間目標の6,000食を突破しました。記念すべき6,000食目となったのは、むつ市在住の佐々木絵里さんご家族で、来店にあわせて記念のセレモニーが行われました。小田野沢地区の「ログレストラン南川」で行われたセレモニーでは、東通ヒラメ料理推進協議会の顧問でもある越善靖夫村長から感謝状の授与があり、その後、同協議会の南川直樹会長から記念品の贈呈が行われました。佐々木さんは「6,000食目と聞いてとても良い記念になったし、料理が色々あって楽しくておいしい」と喜んでいました。

越善村長は「冬場のヒラメの漁獲量減による供給体制などの課題をクリアしていきながらヒラメといえば東通村と思ってもらえるような工夫をしていきたい」とし、南川会長は「目標を達成できたのは一安心。2年目はヒラメ重をもっと認知してもらえるよう村内外に対して企画を考えて地道に活動を続けていきたい」と語っていました。



越善村長も6,000食を祝福
(写真中央が6,000人目の佐々木さん)



6,000人目となった佐々木さん

東通村漁業連合研究会「スルメイカ漁況の見通しに係る研修会」を開催



講師 水産総合研究所 漁場環境部 今村豊氏



講演を熱心に聞く参加者

5月22日(火)、村体育館において、村漁業連合研究会(濱端元一会長)主催による「平成30年度スルメイカ漁況の見通しに係る研修会」が行われました。

43名が参加した今回の研修会では、講師の地方独立行政法人青森県産業技術センター水産総合研究所漁場環境部研究管理員今村豊氏から近年の漁獲動向や水温分布に基づく漁況の見通しについて講演がなされました。

今村研究管理員によると、本県周辺における漁況の見通しは、「秋季発生系群は資源水準が中位・減少傾向にある。この系群が漁獲対象となる漁期前半は、来遊を左右する日本海の7月中旬の海洋環境が良いと予測されるので、漁獲量は前年を上回るが近年平均並みの漁獲となると予測した。漁期後半の漁獲対象となる冬季発生系群の資源水準は低位・減少傾向が強く、産卵場も縮小している。また海洋環境も太平洋沖に暖水塊が形成され、親潮系冷水の差し込みも強いため、漁期後半の漁獲は前年並みで近年平均を下回ると予測した」とのことでした。

参加者は一昨年から続くスルメイカ漁の不漁もあって、今年のイカ漁の見通しについて真剣に耳を傾けていました。依然として不漁が予想されるスルメイカ漁ですが、好漁場が村の沿岸に形成され、見通しを上回る漁になることを願っています。